

物語における機能としての帝

—女の「かぐや姫」性をめぐって

伊勢 光

「キーワード ①帝 ②かぐや姫 ③コミュニケーション ④機能 ⑤読者」

はじめに

ひとつの例として『夜の寝覚』の女君と、『源氏物語』の玉鬘の共通性を考える。そうした時、まず共通点として浮かび上がってくるのは彼女たちの「帝拒否」の姿勢である。その点は重要なものとおさえてよいと思われる。至尊の存在であるはずの帝を拒否する、非常に明確な共通点である。

ただ、それと同時に注意しておきたいのはその拒否の姿勢は確かに特異なものとはいえるが、しかし彼女たち二人にのみ見られる共通点では必ずしもないということだ。それは言うまでもなく『竹取物語』にも描かれる一種の類型としての「女の態度」であった。本稿ではこの「女の態度」「女の姿勢」を仮に「かぐや姫」性と呼ぶことにしたい。

概してこれまでの研究史においては、この「かぐや姫」性があまりに拡大され捉えられてきた傾向があった。代表的な論者

としては小嶋菜温子氏が『源氏物語』の登場人物の（光源氏を含む）複数にこの「かぐや姫」性を見出し、また鈴木泰恵氏は『狭衣物語』の男主人公狭衣大将に「かぐや姫」性を見出している。^{注2}

その論全てが的外れではないにしても、しかし「かぐや姫」性の定義があまりに幅広くなりすぎている感が否めない。永井和子氏が早く指摘するように「物語の女主人公はすべて結局かぐや姫にならざるをえない」^{注3}以上は、もとより「かぐや姫」性という概念自体に問題があるのかもしれない。

しかし、先に挙げた『夜の寝覚』物語の女君と『源氏物語』の玉鬘との間には明確な類似が見受けられるのもまた事実である。特に強調すべき共通点を絞って考えれば、「かぐや姫」性を想定することは意味があるのではないか。そのような考えに基づき、本稿では「かぐや姫」性を狭く捉える。つまり「帝を拒否する」「女性」をのみ「かぐや姫」のいわば直系の「末裔」

と考えて「かぐや姫」性があると定義したい。そのように狭く捉えた際にも『寝覚』の女君は「かぐや姫」性を持つと考えられよう。

『寝覚』の女君を「かぐや姫」と結び付けようとする論は既に永井和子氏や長南有子氏注4にある。そこで本稿ではまず、それから先行の論を踏まえながら女主人公とかぐや姫の、そして新たに玉鬘も加えて共通性をそれぞれ見ていくことにしたい。そして、さらに先行研究では十分になされているとはいいがたい、男(帝)側の共通点についても触れていきたいと考えている。その過程では『竹取』『源氏』『寝覚』の帝だけではなく当然、『狭衣物語』の狭衣帝も(従来の研究のように「かぐや姫」としてではなく)振られる「帝」として俎上に上ってくることになるだろう。

また、そのような「帝」たちが物語において一体どのような役割を負っているのかということも検討していく。「帝」たちが羨慕し迫ることにより、どのような事態が物語に生じるのかということである。そして最終的には、物語が書かれた当時、帝を袖にする物語が受け入れられた理由とは一体何なのかということも検討していきたい。なお扱った本文とページ数は、それぞれ『竹取物語』は『新日本古典文学大系 竹取物語』(岩波書店、一九九七)、『源氏物語』は『新日本古典文学大系 源氏物語』(岩波書店、一九九五)、『夜の寝覚』は『新編日本古典文学全集 夜の寝覚』(小学館、一九九六)、『狭衣物語』は『日本古典文学大系 狭衣物語』(岩波書店、一九六五)である。

一、「かぐや姫」たちの共通性

さて、『竹取物語』における「かぐや姫」の帝拒否の姿勢は激しい。帝が来訪する以前から、帝との結婚の話を聞いただけでかぐや姫は「しるて仕うまつらせ給はば、消えうせなんず」(五四ページ)と強い拒否反応を示す。そして実際に来訪した帝により、強引に連れ去られそうになると見るや影となり、その場より消えてしまう。徹底した拒否の姿勢が見受けられる。そのような強い姿勢は果たして他の「かぐや姫」たちに全く同じように共通するものであろうか。

『寝覚』の女君については、共通するといっている。大皇の宮の策略にはまり帝に捕らえられた女主人公は「なかなか死ぬる心地して、ものもおぼえず」(巻三、二七〇ページ)という状態で、帝の言葉も「何事も聞き分かれず」(同、二七一ページ)というほどの惑乱ぶりである。その心理状態たるや、ただこの状況を「恐ろしく、いみじく、ゆゆしく」(同、二七四ページ)思うだけである。帝ほどの高貴な男性に求められているにもかかわらず、しかし激しい拒否の姿勢を示す女君である。彼女もまた帝を拒否する「かぐや姫」性を強く持っているのであった。

長南氏は「そこ(稿者注、女主人公の一連の態度)にはかぐや姫が帝のもとに出仕することを拒み、『はや、殺したまひてよかし』と言いつける激しい拒絶の姿を重ね合わせる事が可能である」という説明で共通性を指摘するが、全くその指摘の通

り「死」さえも思う拒否の姿勢という点でこの二人の「かぐや姫」は共通するものを持つ。

その共通性は、『源氏』の玉鬘のケースではやや形を変えて看取することができる。というのは玉鬘は帝を拒否する姿勢は見せるものの、「死」までを想起しはしないからである。局にやってくる鬚黒と結婚したことを切々と恨む帝に対し、玉鬘は「うらみさせ給御けしきの、まめやかにわづらはしければ、いとうたてもあるかな、とおぼえて」(「真木柱」三、一三六ページ)と「わづらはし」と思う程度に止まっている。一見すると『竹取』のかぐや姫や『寝覚』の女君との共通性は薄いようにも思われる。

では、これをもって玉鬘はそれら二人の「かぐや姫」とは縁遠いと即断できるかといえば、そうではない。もとより玉鬘は鈴木日出男氏が「異界のような北九州の鄙にさまよった玉鬘は、さらにもう一つの異界ともいえるべき六条院に放たれたのである。『竹取物語』のかぐや姫が、不老不死の理想郷である月の都から、「はかなく」も「穢い」地上にひとり降らせられ、しかも大勢の男たちの求婚にさらされるのと、これも似ていなくはない」と指摘する^注ように、帝拒否の姿勢以外にも「かぐや姫」たちとの共通性が指摘できる女性である(『寝覚』の女君も様々な男に求婚され、また広沢や九条の邸などをさまよっている)。玉鬘に他の「かぐや姫」たちとの差異があるのではない。むしろ「かぐや姫」と玉鬘との帝拒否における差異の原因は、ひとえに帝側の態度の差異によるところが大きい。具体的には帝の

強引さの違い、というところに求められよう。

つまり『源氏』の冷泉帝は、『竹取』の帝のように強引に自分のもとへ拉致しようとしなことはもちろん、『寝覚』の帝のように「衣ばかりは引き交は」して密着していきような行動にも出ない。むしろ「ひたふるに浅き方に思ひ疎まれじ」と彼女に嫌われることを恐れ、ただ「いみじう心ふかきさまにの給」以外の行動には何ら出ようとしない。帝でありながら彼女の心内を気にする、ある意味で「弱気」な冷泉帝の態度には「女性の心内」への恐れが垣間見えているのである(ここから考えればこの後に「女性の心内」に対する恐れ、関心が強い薫を主要人物として「宇治十帖」が書かれたのも自然な流れであったといえるかもしれない)。

このような帝に対しては、この「かぐや姫」、玉鬘は死を思うほど切迫しようがないのであった。長南氏は『寝覚』の女君について「帝から受ける庄迫が大きくなれば、何らかの手段によって帝を拒否することが予想される。恐らくその最終手段が「死」なのではないだろうか」とするが、この「かぐや姫」性は玉鬘にも当てはまるものではあるまいか。歌を詠みかけたただけの帝に対しても「まめやかにわづらはし」「むつかしき世の癖」と繰り返し難ずる玉鬘である。実際に身体的接触が図られたとしたらどうなったか。恐らく、『寝覚』の女君が示した拒否反応と限りなく近づいてくるだろう。やはり、玉鬘も帝を拒否する「かぐや姫」性をもつ女性であった。

そのような拒否反応を示しながら、しかしこの「かぐや姫」

たちは帝に「媚を売る」ような言葉も投げかけているという二面性を見逃してはならない。玉鬘は帝の歌に対し「いかならん色とも知らぬ紫を心してこそ人はそめけれ」（同、一三六ページ）と気持ち理解したように和歌を返し、そして、駄目押しのように「いまよりなむ思給へ知るべき」（同、一三六ページ）と帝の恩を忘れないことをさらに付け加えていく。恋する帝としては、玉鬘を任官させた甲斐があったと感じたことだろう。歌と官位の贈答によるコミュニケーションが成立したことで調子付いた帝は、さらに「うらみ」の言葉を玉鬘に投げかける。このとき帝は玉鬘に「こよなき近まさり」を感じ、いわばこの玉鬘の姿態により帝はすっかり想いをかき立てられた体である。この想いは遠く「竹河」巻まで及ぶとあれば、帝のそそられた想いの強さが分かる。

『寢覚』の女君についても状況は似ている。「のちにまたなかれあふせの頼まずは涙のあわと消えぬべき身を」（巻三、二八三ページ）と和歌を贈られた女主人公は、帝がお帰りになるらしいと見て取り、少し気分を落ち着かせる。そして、「涙のみ流れあふせはいつともうきにうき添ふ名をや流さむ」（同、二八四ページ）という返歌を詠むのである。女君の和歌の結句「名をや流さむ」の「やゝむ」は疑問の構文であり、訳せば「浮名を流すことになるのではないでしょうか」となる。相手（帝）に疑問を投げかけて判断の余地を残す、やや思わせぶりな和歌となっているといえよう。

帝が帰るとのことについて安心したのか、あるいは帝に対して

拒絶し通ず和歌を詠むのはさすがに失礼だと感じたのか。ともかく相手にそのような詠みぶりになっていることは注意を要する。さらに女君も玉鬘同様、駄目押しのように思わせぶりの言葉をつけ加える。「わが大君の」がそれだ。『新編全集』では引歌を想定しつつ「わが大君を忘れましようか」と訳しているが、おおむね妥当な訳だろう。つまり、帝の「尊さ」「ありがたさ」に彼女もまたはっきりと敬意を表しているのである。『寢覚』の帝も、自分の存在が彼女の中に確かに息づいていることを確認する。そう感じればこそ、自分をより強く想わせたいとの願いが強まるのではないか。そうして『源氏』の冷泉帝同様、「かぐや姫」を忘れられない男になっていくのである。

『源氏』冷泉帝が遠く「竹河」巻まで玉鬘を恋慕し続けたように、『寢覚』帝も巻三での閩人の一件以来ずっと現存本の最後に至るまで彼女を恋慕し続ける。さらに『寢覚』の帝は散逸部において彼女を「擬死」させるほどに追い詰めたと推測される。そこまでの恋慕を、全く脈のない女に対して向けることが果たして可能かどうか。歌の贈答によるコミュニケーションの成立、そして帝「思慕」とも取れる発言。それらの「事実」は物語全体から見れば些細なものかもしれないが、欲求不満となっている帝の心中でいやがうえにも増幅されたこのような執念深い恋慕の原動力となっているのである。

もとより、このような「媚を売る」とも取れる行動はかぐや姫その人がとっていた行動であった。かぐや姫は帝に迫られて一旦は影となったものの、帝の「さらば、御ともにはいて行か

じ。もとの御かたちとはなり給ひね。それを見てだに帰なむ」(五七ページ)という要請に応じて、再度美しい姿を帝の前に現す。帝の目に、改めて自身の美しさが焼きつくことは、かぐや姫にも想像がついたのではあるまいか。「なをめでたくおほしめさるゝ事、せきとめがたし」(五八ページ)と、再びかぐや姫を見てしまった帝の思慕は「なを」一層高まっていく。帝の自分への思慕を弱めたいのであれば、要請を頑として拒否して影でいればよかつたはずである。穿って考えれば、帝の想いをさらにかき立てるために、かぐや姫は再度姿を見せたのではないか。そのことは、帝からの文に対して返事を「さすがに憎からず聞こえかはし給て、おもしろく、木草につけても御歌をよみて遣はず」(五九ページ)かぐや姫の姿からも見ることが出来る。言葉によるコミュニケーションは成立させて帝の気を引きながら、決して身体的接触は許さない。それがかぐや姫の基本的な帝への態度であった。気分だけ昂揚させられた帝は、かぐや姫と会ってからというものの他の后を遠ざけ、もっぱらかぐや姫との文通にのみ勤しんだとある。いわば、かぐや姫は帝にプラトニック・ラブを強いたのである。その文通だけは許す態度が、そのような類の恋に慣れない帝をどれほど狂おしくさせたか。かぐや姫への想いの強さゆえに不死の薬を捨てた姿を見れば、それは贅言を要すまい。

帝の「かぐや姫」との文通という点で言えば『寝覚』の場合、さらに事態は複雑である。『寝覚』の帝も何度も女君に手紙を出す。しかし、その手紙は内大臣の読むところとなり、内大臣

の嫉妬を誘うという副作用をもたらす。そしてさらに嫉妬しているにもかかわらず、内大臣は女君に返信を出すよう勤めるという屈折した展開になっているのである。この点については、手紙の媒体となっているまさこ君、督の君との問題とあわせて別稿を用意して考えたい問題である。ひとまず本稿では、『竹取』と『寝覚』との間の「文通」という共通性を指摘するに止める。

このように「かぐや姫」たちはただ帝を拒否するのではない。拒否する一方でコミュニケーションを成立させ、帝の気持ちを——そのような意図が彼女たちにあるかないかは別に——自分につなぎとめることも同時に行っているのである。なぜ彼女たちは、そのような一見矛盾するような行動に出るのだろうか。

一つの理由として考えられるのは、読者側がそのようなヒロインを要請したからではないだろうか。彼女たち「かぐや姫」は自分の身体を自分の思うように扱えはしない。既に帝に迫られる以前に定められた(定められてしまった)人生が彼女たちにはある。かぐや姫は拒否しようとも月の都に帰ることが宿命付けられている身であり、玉鬘は既に夫を持ってしまった身である。『寝覚』の女君にしても「影につきたるやうなる内の大臣」(同、二七〇ページ)が彼女の身体を厳しく規制する。事実、先の「わが大君の」と答えた女君はその直後、内大臣に見られたような気持ちがして罪悪感にとらわれる。そのようなそれぞれ制限のある状態の中で帝を拒否し、かつ帝に対して想い

を引き続けさせる行動を「かぐや姫」たちは取っていく。これは、様々な制限が身に課されている中でも、たくましく生きていこうとする女性たちに対して見本となりうる身の処し方であったに違いない。

というのもこの帝は当時の女性にとって世をつかさどる至高の男性である。その存在を無視はできない。だがやはり今の自分の生き方を曲げるわけにもいかない。至高の男性に恋されるという事態に接したとき、女性はどうすればよいのか。「かぐや姫」たちの物語は中流階級の読者たちに何らかの示唆を与えただけであり、言い換えれば、読者は自分の人生を揺るがしかねない恋について対処する先達の物語として「かぐや姫」たちの物語を必要としたのであろう（そう考えれば『源氏』の空蟬の物語などもこの枠内にとらえられよう）。

また、「かぐや姫」たちの処世術は『無名草子』の語り手の一人が『寢覚』の女君を評して「心上手」と褒め称えた方向性とも一致する。読者たちはこの「心上手」の「かぐや姫」たちの物語を読み「かぐや姫」たちと一緒に帝の恋慕に対処しながら、自分の定められた人生をたくましく生き抜く姿勢というものについて思いをいたしたはずだ。『源氏』の玉鬘も『寢覚』の女君も、決して順風満帆の人生ではない。母のない子であり成人してからも常に悩みを抱えている。その中でさらに帝からの恋慕にも対処しているのである。そのような「心上手」な「かぐや姫」たちの造形は、読者の目標となるものであったといえる。もちろん実人生においては帝や帝に準ずる高貴な男性

に恋される機会などはほとんどなかったはずだが、自らの定まっている人生を揺るがしかねない恋の事態を想起しながら、読者の心は揺れ動いたのではないだろうか。

いわば「かぐや姫」たちは男たちをどう扱うか、そして自分の決められた人生をどう生きていくかということを読者に提示した、いい「お手本」であった。と同時に、読者が要請した「同胞」であり、また「先達」であったのだということができる。

二、機能としての帝——帝たちの共通性

前項では「かぐや姫」たちの帝拒否の姿勢という共通点と、その読者に対する意義を見てきた。

本項では見方を変え、男側（帝）の恋慕が物語にどのような意味をもっているのかということについて見ていく。いわば、帝が「かぐや姫」たちの物語においてどのような「機能」を果たしているのかという問題である。

この問題について、まず非常に明確に対応関係が指摘できるのは「源氏」の玉鬘と『寢覚』の女君である。

先に紹介した長南氏は『寢覚』の帝について次のように述べる。^注

『夜の寢覚』の帝は、道化であった。と言うのも、女君を我が物とするため、その母大皇の宮と謀略を企てた結果、逆に女君の心の深層に封印されていた男君への愛情を認め

させてしまうからである。

長南氏が述べるがごとく、女君は帝に迫られて初めて自分の男主人公への思いの深さを思い知る。このような事態にまず思いつくのが男主人公のことだったからである。本文には以下のようにある。

「あないみじ。内の大臣の聞きおぼさむことよ」とは、ふと、おぼえて、「あさましう、あやしと、御覧じおぼさむことは」
(同、二七〇ページ)

「かくてはまた、内の大臣に、いかなることを言ひ聞かせたまふらむとすらむ。なにし、やむごとなき基を見ながら、我はこよなき劣りざまにて、交じらむかたをこそ、すべてあるまじきことにも、あながちにもかけ離れつつ、恨みられる。それよりほかにつゆも怠りありて、聞き疎まれむな。おほかたにとりても、あるまじきことなりしに、我が心にもあらずもてなされし藻塩の煙は、命を限るまでおぼえしを、まいてこの際は、『いささかのまよひこそありけれ』と聞こえむ恥づかしさ』を思ふに、なほ消えぬ、わびしくて、『明日までありと聞こえずもがな』とぞ、思ひまどはるるや。
(同、二七三〜二七四ページ)

帝に迫られた女君は、何よりもまずこの事態を「内の大臣の

聞きおぼさむこと」を恐れる。内大臣と「かけ離れ」ていなくてはならないという切実な現状認識、そして「かけ離れ」ている以外の理由で内大臣に「疎まれ」たくはないという思い。帝に迫られてはじめて、彼女は自分の気持ちを明確に認識する。危機が去って後、彼女は「あないみじ。内の大臣、いかに聞きおぼさむ」と、うちおぼゆることのみ、先に立ちつるも、今思ふぞ、あやしき」(同、二八九ページ)と感ずるが、それでもなおこの一件に対する内大臣の反応を「いかにたまはむとすらむ。いかに答へやらむ」(同、二九〇ページ)と非常に気にしている様子がうかがえる。

『新編全集』の頭注はこを「これも、つまりは内大臣思慕の表れである」とするが、「思慕」はともかくとしても彼女は自分の心にどれだけ内大臣の存在が大きいかということを思い知ったのである。これは帝の闖入がそのような心的状況に追いやったという意味で、帝が二人の距離を縮めたという言い方ができよう。今後、女君は自らの宮中からの退出という目標に向かって男主人公と手を取り合っていくことになる。内大臣に「あが君、今は、いつもいつもただ御心なり。疾く出でたまひて、今宵もまかだめべく奏したまへ」(巻四、三三〇ページ)と懇願する姿は象徴的である。女君がここまで本心をさらけ出して内大臣に懇願したのは、これまでの『寝覚』にはなかったことであった。帝は意図せずして、女君に男君への想いの深さを自覚させたのである。

同じようなことは、『源氏』玉鬘にも言い得る。玉鬘は「寝

覚』の女君のように男（鬚黒）に対しての好意を自覚したりはしない。ただ、帝にしても源氏にしても「違ひ給へるところ」がない「わづらはし」い「むつかしき世の癖」を持つ男なのだと彼女は気づく。誰もが羨むような男たちも、玉鬘にとつては所詮は好色な「世の癖」を発露させる「わづらはし」い存在でしかなかった。であるならば、定まってしまった人生を生きようという賢明な判断が彼女には働いた。そして、玉鬘は鬚黒との結婚生活に入っていく。帝の恋慕を忌避し、鬚黒に身を委ねようとする姿が次のように描かれる。

大将は、かく渡らせ給へるを聞き給て、いとゞ静心なければ、急ぎまどはし給。身づからも似げなきことも出できぬべき身なりけり、と心うきに、えのどめ給はず。まかでさせ給べきさま、つきぐしきことつけどもつくり出でて、父おとゞなど、かしこくたばかり給てなん、御暇ゆるされ給ける。

（真木柱）三三 一三七ページ

このまま宮中にいたら、また帝に迫られる恐れがある。その時こそは実事を挑まれるのではないか。あるいは実事こそなくとも、そのような噂が立つのではないか。玉鬘はそれを恐れる。男主人公に懇願して宮中を退出した『寢覚』の女君とはだいぶ程度の差があるものの、今までの拒否一辺倒の態度から考えれば、鬚黒の行動を「えのどめ給はず」というのは玉鬘が鬚黒に見せた精一杯の好意ということができよう。玉鬘もまた、帝に

迫られたことを契機に、夫と手を取り合い、宮中から退出していくのである。

このように玉鬘のケースでも、帝が自らの想いを表出させたがゆえに「かぐや姫」たちは帝を忌避し、自分に用意された「現実」を選び取っていくという構造が見て取れることになる。恋慕する帝を忌避した玉鬘は、鬚黒との生活に完全に満足しているわけではないのにこの後、決して帝からの手紙に対して色よい返事をするのではない。帝からの要請はあっただろうに、（尚待であるにもかかわらず）玉鬘が出仕することも一切ないのである。強い拒否の姿勢があるといっているのではない。

ここから前項で見たような帝と玉鬘のコミュニケーションの成立はあくまで処世術に過ぎなかったことがわかる。以後、本格的に鬚黒との夫婦生活に入り、玉鬘はその年の内に子どもを出産する。これは帝のもとを退出した『寢覚』の女君が男君との間に若君を産むのと共通して、「かぐや姫」の末裔たちが帝ではなく自分に定められた「現実」の男たちと暮らしていく姿に他ならない。物語文学においての帝とは、一面このような女たちに「現実」を向かせる機能を持つ存在であったということがいえよう。

なお、この二人の物語を強いて『竹取』のかぐや姫のそれと重ね合わせて考えるならば、その二つの物語には『竹取』では描かれなかった「かぐや姫が月の都に帰った後の姿」が描かれているということになろう。「かぐや姫」たちはそれぞれ自分に定められてある「現実」と折り合いをつけていく。『竹取』

のかぐや姫の場合はそれが天の羽衣を着せられるという形でなされる（帝の恋慕がかぐや姫を月の都に帰らうと思わせた可能性もあるが現時点では根拠に欠ける。なお考えたい）わけだが、しかし玉鬘や『寢覚』の女君はそうはいかない。何か「現実」と折り合いをつけるための「加害」が必要なのである。その「加害」が帝の恋慕であり、その結果、彼女たちは鬚黒や内大臣といった「現実」の男たちとの紐帯を確認していくことになる。

このような事象を確認する限り「かぐや姫」たちの物語において帝という存在が持つ意味合いとは、「かぐや姫」たちへの「加害」という「機能」的なものしかないようにも思われてくる。『竹取』ではまだはっきりしない状態であったが、『源氏』の帝（冷泉帝）にしても『寢覚』の帝にしても先に見てきたように女に袖にされ、それぞれの別の男のほうを向かせる働きしかしていないのである。

いや、もとより彼らに帝らしい権威権力で物語にその存在感を示す場面がどれほどあったらどうか。『うつほ物語』で帝や院が何度となく宴を主催するのは対照的な帝像ではなかったか。『源氏』で冷泉帝は行幸を行うが、それとても描かれる分量は非常にわずかである。しかも冷泉帝が玉鬘に顔を見られるという設定を思い合わせれば、いわば「加害」のために用意された前準備の場面に過ぎないとも考えられよう。そもそも場面が「見る」帝ではなく「見られる」帝を語っている点も、帝の側に場を動かす主体性がないことが分かる。『寢覚』の帝にい

たってはそのような行幸すらない。どちらの帝にしても彼らに焦点が当たっているとは考えにくく、帝中心に読みを進めるのは困難といわざるを得ない。彼らが「機能」的存在だというのはそういう意味である。

したがって、『源氏』や『寢覚』の「かぐや姫」の物語においては、もっぱら帝ではなく帝に恋される女たちのほうに焦点が当たっているといってしまうのではないだろうか。そのような「機能」としての帝がいるからこそ、女性が自分の現実と向き合う際の決意、あるいは諦念といったものが読者に鮮やかに浮き上がってくるのではないか。現実と向き合う二人の女性の姿は物語の進行によりそのまま苦悩する二人の母の姿になる。

それは一口に成長と括ることはできない。子どもがあるがゆえに出家がかなわない（つまり真にかぐや姫にはなれない）女性の生の悲哀へとつながっていくのだ。前項で「かぐや姫」たちは女性読者の「同胞」「先達」であったらうと述べたが、それはこの帝を袖にした後の現実を向いた「かぐや姫」たちの姿にも当てはまるものであろう。日々の生活に必ずしも満足できない「かぐや姫」たちは、やはり女性読者の「同胞」であつたらう。

しかし、常に物語において帝という存在が「機能」に過ぎないのかといえば、そうではあるまい。確かに『源氏』の冷泉帝と『寢覚』の帝については、今まで見てきたように彼らの問題は深められているとはいいがたい。彼らが欲望を表出するなり女性たちは激しく拒否して別の男のもとへ走り、物語はそ

った女性側を中心に追っていた。帝の苦悩や欲望表出に至るまでの過程といったものは、女性の心理と比べて中心的にとらえられはしなかった。その一方、似たような展開を辿りながらもこの「男」側の問題を深めようとして、帝が抱える苦悩を中心的なテーマにして描かれた物語も存在する。『狭衣物語』がそれである。

『狭衣物語』には帝を拒否する非常に「かぐや姫」性の強い女性が同時に二人も登場する。源氏の宮と女一の宮である。狭衣はしつこく彼女たちに迫っていくが、彼女たちを得ることはできない。この問題はなお別稿を用意して論ずべきかと思われるが、さしあたり本稿では「かぐや姫」と帝とのコミュニケーションの場面を一つ挙げて、狭衣の問題を考えたい。

次の本文は、即位した狭衣帝が斎院となっている源氏の宮に恋慕の情が抑えきれず、歌を詠む場面である。

「恋ひて泣く涙にくもる月影は、宿る袖もや濡るゝ顔なる

村雲晴れ果つめるを、「いかやうにてか、たゞ今、かく、御覽ずらむ」と、ゆかしう「なごようにて、近う候ふ殿上童を、たてまつらせ給へれば、「げに、雲の上は、まいていかに」と、思しやらせ給へる秋の月影なれば、おかしき御消息なれば、待ち見給はんけしき、恥しう思しやらせ給へれど、今は人づてに聞えさせ給はんも、あるまじき事なれば、

あはれ添ふ秋の月影袖馴れでおほかたのみながめやはする

(巻四、四三三ページ)

源氏の宮の「かぐや姫」性が、はっきりと現れているといえよう。狭衣に対し「人づてに聞えさせ給はんも、あるまじき」と帝の權威を認めて、帝の気持ちに添うかたちで歌を詠むことで文通によるコミュニケーションを成立させている。今まで見えてきた「かぐや姫」たちと非常に似通うといっていだろう。

このような源氏の宮の姿勢に接した狭衣帝は「差し向かひ聞えさせたる心地のみせさせ給て、いとど大殿籠るべくもなければ」(同、四三四ページ)と不眠に陥ることになる。狭衣帝は源氏の宮に似た式部卿宮女を召すが、しかし当然満足できるものではない。源氏の宮に「かぐや姫」的コミュニケーションの姿勢を含めて心奪われている以上、顔や仕草がどんなに似ていても帝は他の女では満足できないのである。「竹取」の帝もそうであったが、他のどんな女にも満足できない、帝としては病的な姿を『狭衣』はさらに詳細に描いているといえよう。

しかも、「竹取」以上に狭衣帝の事態は深刻である。顔の似る式部卿宮女を召すことで気持ちに慰む一方で、似ている女性と接することでなおさら源氏の宮が忘れられなくなる。その展開は「竹取」のようなプラトニック・ラブが(こと帝において)非現実的だと考えた上での新味だろうが、と同時にこの展開は狭衣帝の源氏の宮に対する未練、執着が一身から離れない

いことを読者に暗示する。帝の恋の物語として非常に現実的かつ冷徹な筋書となっているのである。

『狭衣』の大きな達成は、このようなこれまでの物語をふまえた上で帝側の物語を描ききったところにあると考えられる。この、振られる側の「帝の恋の物語」としての『狭衣』はなお考えていきたい。本項では、さしあたり『源氏』『寝覚』における機能としての帝をおさえつつ、それとは一線を画す帝を描いている『狭衣』について見通しのみ述べた。

三、結びにかえて

第一項では「かぐや姫」性を持つ女たちが、帝を拒否しつつも帝の気持ちを引きとめていたことを見てきた。そして第二項では、帝が「かぐや姫」たちに迫ることがすなわち彼女たちをして定められた「現実」へと向かわせることを見てきた。ここで最後に結びにかえて、ではなぜそのような物語が繰り返して生産されたのかということについて、少し考えてみたい。

まず読者側の問題としてこの事象を捉えるならば、「同胞」「先達」としての「かぐや姫」たちと一体になって、帝に恋慕されてみたいという読者の願望があったのではないかと思われる。至尊の存在である帝に恋されるが、なびかない。物語でそのような夢を見た女たちの姿を想定できるのではあるまいか。実在の帝を崇拜する読者であればもちろん、帝を快く思わない読者にとっても、帝の気をひきつつ袖にするという展開は胸のすくものであったに違いない。ただ、袖にしつつもそれで帝が

あきらめてしまっただけで読者は残念がる。帝がしつこいぐらいに好意を持ち続けるという展開も、その読者の無言の要請があったからではないか。

さらに読者の問題を考えるならば、帝から恋慕されても結局は自分に定められた「現実」を選び取っていく「かぐや姫」の姿は、読者たちに安心感を与えたであろう。言い換えれば苦悩の末にさほどよくもない現実と折り合ってしまった「かぐや姫」たちの姿を描くことで、物語は同じようにさほどよくもない現実を選び取って生きている読者にある種の勇気を与えているのである。読者は「かぐや姫」たちと自分を重ねあわせ、自分たちの人生があながち劣っているものではないことに気づく。そしてまた明日から生きていこうと思う。物語を味わう意味とはひとつ、そのようなところにもあるのではないだろうか。

また、その一方で読者側の問題を離れてこの事象を考えるならば、「かぐや姫」たちの物語では帝の位の相対化が行われていることにも注意しなければならない。それは例えば『寝覚』で帝が女君と結ばれるためなら「ところせき位なども、ひたぶるに捨てむとなむ思」（巻四、三二八ページ）だったこと、あるいは『狭衣』で自分への讓位が決まった狭衣が「齋院を見たてまつり給はん事の、今は有難うなりぬべき口惜しさ」（巻四、四二六〜四二七ページ）をまず思い浮かべたことを見ても明らかである。第二項では物語で「機能」的存在としか働いていない、引き立て役の帝の姿を見てきたが、「かぐや姫」たちの物語においては基本的に帝がそういった位置にいるということも

見逃せない事実であろう。

また、本稿ではそういった「かぐや姫」たちの物語に対し、帝の恋の物語として異色を放っている『狭衣』に着目した。帝の位は相対化されつつも、物語の主人公として帝の恋に焦点が当たっているという独自性が『狭衣』にはある。第二項では『竹取』のプラトニック・ラブが非現実的なものであると考えから、式部卿宮女を登場させ帝の消えない執着を暗示した『狭衣』のありようにふれたが、そのような前の物語に対して新味を出し、独自色を出そうとする後期物語の苦心は今後とも注意深く研究していく必要性があると思われる。

この『狭衣』の特色を考えた上で大雑把に言うならば『竹取』『源氏』の「かぐや姫」の物語を享受し、その女「かぐや姫」側の問題をより鮮明に切り取ったのが『寢覚』であり、その男「帝」側の問題をより鮮明に切り取ったのが『狭衣』なのだということができないのではないだろうか。乱暴かつ図式的な説明でありなお検討が必要であろうが、「振られる帝」としての狭衣像やそれを描く『狭衣』とはいったい何なのか、あらためて考察したい問題である。「かぐや姫」性を持つ女性たちの物語が形を微妙に変えながら繰り返し生産されていった理由もまた他の側面があるだろう。そして文学史の中にその物語をそれぞれどのように位置づけるか。課題はなお山積している。

注

1 「聖なる暴威の光―アマテラス・かぐや姫・光源氏」

①季刊いちこ 24 一九九二、七「かぐや姫幻想」森話社 一九九五所収）など

2 「狭衣物語とへかぐや姫」―貴種流離譚の切断と終焉をめぐって①（『武蔵野女子大学紀要』32 一九九七、三）

3 「寢覚物語―かぐや姫と中の君と」（『国文学』31 一九八六、一一）

4 「夜の寢覚の帝」（『中古文学』58 一九九六、一一）

5 「さすらう女君の物語」（『新日本古典文学大系 源氏物語 三』岩波書店、一九九五所収）

6 このプラトニック・ラブの問題については高田祐彦氏が『文学』（二〇〇七、九・十）の「日本文学と恋」の座談会で、これがプラトニック・ラブの「大きな出発点」と指摘する。また、小嶋菜温子氏は『かぐや姫幻想』（前掲）でプラトニック・ラブを強いるかぐや姫について「まさしく傾国というにふさわしい」と述べている。

7 注（4）に同じ

（いせ・ひかる 博士後期課程）